

血と雫、それは、日常の、飢えと渇き。

November 22, 2012 / text : Genet (AUTO-MOD)

彼の言葉は、まさに彼の血であり、その血の雫で綴られたリリックは、彼のごく一般的日常さえも、その突き詰めた対峙から紡ぎ出し、それが一個人の吐露でありながら、ここまで魂を刻む言葉に仕立て上げた事には、正直驚きを隠し得ない。Z.O.Aの幻影を総て断ち切った果てに森川が見つけた世界は、凜としてその詩人の血を際立たせる。これはロックなのか、それともポエトリーリーディングなのか、森川のボーカライゼーションは、そのこの住み分けに拘る事なく、歌唱として彼の言霊達を空気の粒子に擦り合わすように解き放つ。僕は、これほど歌唱と言う言葉が似合うヴォーカリストを感じた事が無かった。森川のボーカライゼーションは、何処迄もモノクロームに広がる。そんな血と雫の世界に、唯一、色彩を与える事を許されたのは、割礼のギタリストでもある、山際英樹の存在である。そんな空気の流れに、その彩どりを織り込むギター音は、とても土着的で、安らぎと共に、心地良いサイケデリックな吐息を聴かせてくれる。青蝕器、あけぼのいずをへて、ハイライズ、光束夜、マヘルシャルルハシュバズ、渚にて、シェシズ、不矢者と、日本のアンダーグラウンド界をドラマーとして渡り歩いた高橋幾郎によって叩き出されたリズムは、その静寂もしくは静止された時に『血と雫』のみが刻み得る、外界を遮断した、彼らだけの因果律を張り巡らす。その精密な三者の音の絡み合いは、粒子間のレベルに浸透し、やがてその共振は、僕の身体を軟らかな弛緩と共に拘束していく。

血と雫、それは、日常の、飢えと渇き。いつしか何処迄も心地良く、そして何処迄も残酷な響きを奏でる。共鳴し続けるその震えは、僕の身体を蝕み、むしろ温かささえ垣間見せる。